

## 第八卷

今日、私は、自分の価値を百倍にする。

桑の葉は、人間の才能にふれて、絹になる。粘土の荒原が、人間の才能にふれて、城になる。キプロスの木が、人間の才能にふれて、聖堂になる。羊の毛は、人間の才能にふれて、王様の衣装になる。

木の葉や、粘土、樹木、毛などの価値が、人間の才能によって、百倍にも、千倍にもなるのなら、私は、私の名前がつけられた粘土をもって、同じことができようというものだ。

私は、一粒の麦に似ている。麦には、三つの未来がある。その第一は、袋に詰められ、倉庫に貯蔵され、やがては、豚の餌になるものである。その第二は、粉に挽かれて、パンに焼かれるものである。その第三は、種として、大地に蒔かれ、幾千粒もの黄金の実りを生み出すものである。

私は、麦に似てはいるが、一点、違うところがある。それは、麦は、自分の未来を選択す

することはできないが、私はできるといふ点である。私には選択の自由がある。私は、自分の人生を、豚の餌えさにすることを拒否することもできるし、また、自分が、失敗と絶望の石臼いしうすに挽ひかれて、パンにされ、他人に食いつくされてしまうことから逃のがれることも可能である。

今日、私は、自分の価値を百倍にする。

麦の粒が成長し、何倍にも増えるためには、大地の暗黒の中に、一時、閉じこめられなくてはならぬ。すなわち、地面に蒔まかれるのだ。

私の、失敗、絶望、無知、無力などは、大地の暗黒を表わし、私はまず、その中で成熟するのである。麦はやがて、芽を出し、花を開く。ただし、それまでは、雨と太陽と暖かい風をもつて、大切に養育されなければならぬ。そして同じように、私も自分の夢を実現させるために、自分の肉体と精神を、大切に養育しよう。

麦は、成長するためには、自然の気まぐれに左右されるが、私にはその必要がない。なぜなら、私には自分の運命を選択する力があるからだ。

今日、私は、自分の価値を百倍にする。

では、どのようにすれば、私はそれを成しとげられるか？

まず、私は、こまかく目標設定を行なう必要がある。その日一日の目標を具体的にたてるのだ。そして、その週の……、その月の……、その年の……、最終的には、人生の目標を明確に設定するのだ。

目標をたてるためには、まず、自分の人生の目的を、明確にさせておくことが必要である。ちようど麦が殻を破り芽を出す前に、雨が必要であるように……。

自分の人生の目的がはっきりしたら、私は次のように目標設定する。

まず、私の過去の業績を考え、自分の能力はこのぐらいだろうと、推量した数値をもとにして、それを百倍に設定するのである。そして、この百倍の数値が、今後の私の努力目標の基準になる。

私は、目標が高すぎるといって恐れない。月をねらって投げた槍がはずれて鷺に当たったとしても、鷺をねらってはずれて岩に当たってしまったより、はるかにマシではないか。

今日、私は、自分の価値を百倍にする。

目標が高すぎるといって、私は恐れない。たとえば、その目標に到達する前に、何度つまずこうとも……。つまずけば、立ちあがればいいのだ。人は暖炉だんろの前へ行くときでさえ、何度かつまずくものだが、それと同じことである。つまずくことがないように生きるには、這はって生きることだ。ちようど、虫が這はうように……。

私は虫ではない。私はネギではない。私は羊でもない。私は人間である。他人には、粘土ねんどで洞窟どうくつを作らせておけばよい。私は私自身の城を築きずくのだ。

今日、私は、自分の価値を百倍にする。

太陽は大地を暖めあため、蒔まかれた麦の種は芽を出す。巻物の言葉は、私の人生を暖めあため、私の夢を現実のものとする。今日、私は昨日より一段優まった業績を残す。今日、私は全力を尽つくくして、今日の山を登る。しかし、明日は、今日よりもより高く登ろう。そして、その次の日はさらに高く……。

私はもはや、他人を競争相手としない。私の競争相手は、私自身である。私は、私自身の

残してきた業績を越えていくのである。

今日、私は、自分の価値を百倍にする。

暖かい風は、麦に成熟を促す<sup>うなが</sup>。そして同じ風が、私の目標を他に宣言せよと促す<sup>うなが</sup>。私は聞いてくれる人を選び、また、話す言葉を選びつつ、慎重に<sup>しんちよう</sup>、しかし高らかに、私の抱負<sup>ほうふ</sup>と理想を宣言する。いったん口にした以上、みっともないので、私はその言葉を取り消すことはない。かくて私は、自分自身の予言者になるわけである。

たとえば、人びとは笑っても、とにかく、彼らは、私の計画を聞き、私の夢を知ったわけである。私は、それを成しとげないかぎり、私の面目<sup>めんもく</sup>を守ることはできないのである。

今日、私は、自分の価値を百倍にする。

私は、低すぎる目標設定をするという、恐るべき過<sup>あやま</sup>ちを犯さない。

私は、失敗者がやろうとしない仕事をする。

私は、つねに、手の届く範囲において、手を広げていく。

私は、市場における自分の業績に満足することはない。

私は、一つの目標が達成されれば、さらに、より高い目標を設定する。

私は、つねに、次の一時間が、今の一時間より高い業績をあげるよう努める。

私は、つねに、自分の目標を世間へ宣言する。

しかし、私は、過去の功績については、自分から公表したりはしない。それは自慢になるからである。しかし、世間が、私を高く評価してくれるのなら、私は拒まない。私は謙虚に、それを受けよう。

今日、私は、自分の価値を百倍にする。

一粒の麦が百粒になれば、そこからは、百本の茎を生ずる。そして、これを十回くり返せば、その量は、地上のすべての都市を養ってあまりあるほどのものとなる。私は、この最初の一粒の麦以上のものでありえるはずだ。

今日、私は、自分の価値を百倍にする。

一つの目標が達成されたなら、私はさらに新しい目標へ向かう。そして、またそれをくり返してゆく。やがて、この巻物の言葉が、私の中に満ち溢れてくる<sup>あふ</sup>るとき、世間の人びとの中に、私の偉大<sup>いだい</sup>さに対する驚嘆<sup>きょうたん</sup>の<sup>き</sup>声<sup>こゑ</sup>が湧き<sup>わ</sup>おこってくるのである。